壁を抜ける、壁を作る
――オベリウ派ウラジーミロフとハルムスの創作について

小澤 裕之

はじめに

本論文の目的は、日本ではまだ研究の行なわれていないオベリウ派、ユーリー・ウラジーミロフ（1909-1931）の創作の諸特徴を詳らかにすることである[1]。詩や散文は 10 編ほどしか現存しておらず、また、彼に関する研究も世界的に極めて少ない。このように研究材料は限られているものの、他のオベリウ派の創作との比較を通じて、その特徴を浮き彫りにすることができる。本論文では、中でもダニイル・ハルムスとの異同に着目する。ゆくゆくは、得られた分析結果をオベリウ派全体の創作哲学や創作実態を解明するための足掛かりとしたい。

研究者のトカレフはすでに、ウラジーミロフとハルムス両者のテクストの共通点を指摘している。すなわち、不条理なプロット、最も卑近な現実と幻想との混淆、日常化された残酷さ、陳腐化した死、単純化されたシンタクスである[2]。だが両者の一致点はこれに留まらない。たとえば、ウラジーミロフ唯一の「大人向け」のテクスト『スポーツマン физкультурник』には、ハルムスと同様、良識、常識、規範に挑戦し、逸脱しようとする志向性を認めることができる。『スポーツマン』の中で、そのような逸脱行為として表象されているのが壁抜けである。男はこの能力によって華々しい成功を収めるが、人生の目的について真剣に考えたことを契機として、次第に不幸に見舞われてゆく。『スポーツマン』を常識的な思考や有用性といった既存の価値観に対する、ウラジーミロフからの反駁と読み解けば、ハルムスらオベリウ派の多くが残した創作と理念が重なる[3]。

また、『スポーツマン』と同じ時期に、ハルムスもやはり壁をモチーフとした掌編を書いている。そこでは「思考する技師たち」が壁を建設する。ウラジーミロフの主人公は考えることで壁抜けに失敗し、ハルムスの技師たちは考えることで壁を建設するのだ。一方は壁を抜け、一方は壁を作る。行動の結果こそ正反対だが、二人のオベリウ派は考える行為をめぐり、同じ問題意識を共有していたと判断することができるだろう。

しかしながら、ウラジーミロフとハルムスの創作には相違点も少なからず存在している。トカレフの述べるように、「最も卑近な現実と幻想」が「混淆」している点は共通しているとはいえ、「混淆」の仕方が異なっているのだ。仮に、思考の系列――現実／日常／常識／理性――と脱思考の系列――幻想／非日常／非常識／壁抜け――があるとすれば[4]、ウラジーミロフの散文においては往々にして二つの系列が争い、やがて前者が勝利するのに対し、ハルムスの散文においては双方が地続きの関係にあり、必ずしも一方が他

方を負かすことがない。この相違は、子どもの対話形式で書かれた両人の散文『あおい点 Синяя точка』（ウラジーミロフ）と『コーリカがブラジルに行き、ペーチカがそれをしんじなかった話 О том, как Колька Панкин летал в Бразилию, а Петька Ершов ничему не верил』（ハルムス）の結末部に端的に表れている。

以上のように、ウラジーミロフの創作にはハルムスの創作との類似点も見出せるものの、彼はハルムスよりはるかに現実的で常識的な小説を書くなど、相違点も存在している。本論文ではまず、彼らの創作上の緊密な関係性を詳らかにしたうえで、両人の創作における異同を具体的に検証してゆくことにする。

1. 二人のオベリウ派

ユーリー・ウラジーミロフは 1909 年にペテルブルグで生まれた。母方の祖父は著名な建築家アレクサンドル・ブリュロフ、その兄はやはり著名な画家カルル・ブリュロフであり、母親も『アポロン』誌の編集部に勤めていた。ユーリーは幼時から芸術的環境に親しんでいたといってよい。少年時代の彼は友人らと演劇サークルを作り、学校新聞に詩・小説・コラム等を書いていたほか、青少年スポーツクラブ（КЛУМС）のスキー部門代表に選出されるなど、スポーツにも打ちこんでいたという[5]。

1929 年、ウラジーミロフは児童向けの詩『オーケストラ Оркестр』を発表し、それを機に児童文学作家マルシャークの知遇を得た。この 18 歳の少年は児童雑誌『ハリネズミ』と幼児雑誌『マヒワ』の編集部に出入りするようになり、そこで詩を書いていたハルムスやヴヴェジェンスキーらと出会った。予期せぬもの・独自なものが高く評価されていた編集部に突然現れた彼は、その創作の新奇性ゆえに、すぐに仲間として迎え入れられたという[6]。そしてハルムスらが 1 年以上前に結成していたグループ「オベリウ」に加入するに至る。

ウラジーミロフの「オベリウ」における活動は、彼の芸術上の志向性を垣間見せてくれる。1930 年 4 月、オベリウ派はレニングラード大学の学生寮でパフォーマンスを行なった。「クワスの近くを昇降段が通った」、「我々はピロシキに非ず」といった奇怪な「オベリウのポスター」を彼らは掲げ、自作の詩を朗読するなどした。しかし、学生たちからは批判を浴びたという[7]。このパフォーマンスを槍玉にあげた記事は、反伝統的なオベリウ派の文学を擁護するウラジーミロフの姿勢を、いみじくも克明に描きだしている。オベリウ派を非難した記事は、皮肉なことに、オベリウ派の言動を伝える貴重な証言となったのだ。

> ウラジーミロフは到底真似できぬような厚かましさで、集まった学生等のことを、迷い込んだヨーロッパの都市で自動車を目撃した野蛮人呼ばわりした。[8]

ウラジーミロフが自分たちの文学を理解できない人びとを「野蛮人」と呼び、非難している様子が記されていることは、重要である。彼もまた他のオベリウ派と同様、常識や伝

統的な表現の反対者であることを明確に証し立てているからだ。

ウラジーミロフより 4 歳年長のハルムス（1905-1942）は、当時すでに複数の文学／芸術グループを渡り歩いており、マレーヴィチをはじめ著名な芸術家たちとの交友も多かった。だが、それにも劣らぬ緊密な創作上の関係をこの少年との間に築いた。彼と出会った 1929 年、ハルムスは自らの雑記帳で、その名に少なくとも 13 回言及している（5, 288; 295-297; 301-302; 305; 314; 330; 6, 170）[9]。この年に限れば、その回数は共に仕事をしていたマルシャークへの言及の数と同等であり、『ハリネズミ』と『マヒワ』の編集を務め、オベリウ派の面々と親しかったオレイニコフへの言及回数を上回る。

特に 1929 年 5 月 22 日の雑記帳には、「オベリウ」の仲間レーヴィン、ウラジーミロフ、そして自分（ハルムス）の三人の協働で執筆したというテクスト『国立出版所の屋根の上の見張り腱 Сустав дозорных на крыше Госиздата』を残している（6, 168-170）[10]。「見張り番」ならぬ「見張り腱」を務める者が遵守すべき、幾つもの規則や条件を箇条書きにしたためたこのテクストには、「喫煙家、やむを得ぬ場合は非喫煙家であること」（6, 169）といったノンセンスな条項が並んでいる。形式からいえば、小説というより行政文書に近いものの、奇怪なタイトルとそれに見合った内容からいえば、滑稽なノンセンス小説を思わせる。その意味では、オベリウ派による共同創作の試みとさえみなすことができるだろう。

ウラジーミロフの創作には、ハルムスのテクストと相関しているようにみえる、あるいは彼とのエピソードに直接由来しているものが存在する。たとえば、学のある犬の登場する短編が前者に当たる。実はそのテクストはすでに失われているのだが、同時代人で児童文学作家のラフタノフによれば、それは「何にでも変化（へんげ）することができ」る「学識高い小犬 ученая собачка」の物語だったという[11]。一方、ハルムスも『犬のブブブのこと Про собаку Бубубу』（1935）という、学のある犬の登場する短編を『マヒワ』に執筆している。それは「絵をかくことだってできる」「かしこい犬 умная собака」の物語だ（3, 180）。ウラジーミロフとハルムスは相似たモチーフを共有していたことになる。

また、ウラジーミロフの詩『おかしな人たち Чудаки』には、ハルムスとの間に起きた実際のエピソードが交えられている。ハルムスの草稿に基づき、多くの児童文学を世に出したニコライ・カヴィンは、この有名なエピソードの顛末を次のように説明している。曰く、モスクワへ行くハルムスにウラジーミロフが 5 ルーブル硬貨を 2 枚与え、複数の買い物を頼んだ。だがハルムスは友人の依頼を忘れてしまい、言い訳をした。どの 5 ルーブル硬貨でどの品物を買えばよいのか混乱したというのだ[12]。「おかしな人たち」にはその出来事が反映されている。「ぼくらは忘れちゃったのです。／どの 5 ルーブルが／どの帯で／どの 5 ルーブルが／どの帽子で／どの 5 ルーブルが／どれなのか」[13]。

このように、ウラジーミロフは時にハルムスと協力して書き、時に類似するモチーフを共有し、時に二人に起きた出来事を自作に活かした。彼らの間には創作上の密接な繋がりがあったといえるだろう。双方の創作は区別しがたいことさえある。たとえばウラジーミ

ロフ『スポーツマン』は、ハルムスの手によるものと勘違いされ、誤って彼の著作集に収められたことがあるのだ[14]。

以下、『スポーツマン』の内容を確認したうえで、この掌編とハルムスの創作との異同を指摘してゆくことにしよう。

2. レニングラードの壁抜け男

2-1.『スポーツマン』の内容

『スポーツマン』（1929?）はウラジーミロフが大人向けに著した、現存する唯一のテクストである[15]。主人公イワン・セルゲーエヴィチはレニングラードに暮らす独身の事務員だが、「壁をすり抜ける」という超常的な能力をもっている。邦訳すれば 2000 字にも満たないほど短いこのテクストは、彼の一生を一筆書きのように素早く描いてゆく。それがあまりに急すぎるため、一見すると、壁抜けで社会的成功を収めた男が、年とともに転落してゆく幻想譚としか映らないかもしれない。だが、つぶさに読めば、この物語がある奇妙な法則に支配されていることに気がつく。その法則を理解することこそ、オベリウ派ウラジーミロフの創作を理解する方途である。

『スポーツマン』は、イワン・セルゲーエヴィチが壁抜け能力を披露して華々しい成功を収めてゆく様子を描いた前半と、不幸が度重なってゆく様子を描いた後半とに、内容が大きく分かれている。分岐点となるのは、テクストのちょうど中程、彼が居酒屋で人生の目的について問われる場面である。

> 「イワン・セルゲーエヴィチさんにお尋ねしたいのですが」ある見知らぬ郵便配達人が居酒屋で彼に言った。「あなたは何がお出来になりますか？　何のためにこの世に生きていらっしゃいますか？」
>
> 「私はね」イワン・セルゲーエヴィチは言った。「壁を通り抜けることができますよ」
>
> (…)
>
> 「なるほど」郵便配達人は言った。「分かりました。でもそれは問題の科学的な解決ではありませんね。純然たる偶然です」(97)

この出来事以降、『スポーツマン』には災難が続出することとなる。イワン・セルゲーエヴィチが居酒屋から帰宅すると、「妻の耳が屋根から落下したトタン板に削がれて」しまう。これが第一の災難だ。ところが彼は妻の容体にはお構いなく、「問題の科学的な解決と目的についてずっと考えつづけ」る。ようやく彼が「人生の目的」を「どうだっていい」と退けたときには、「妻はもう事切れて」いる。

「問題の科学的な解決と目的」について考えないことを選択した彼は、妻の死後も壁抜けをつづける。しかし、壁抜けを成功したエピソードがひとつひとつ描かれていた、このテクストの前半とは打って変わり、後半ではその様子は次の二つの文でいとも簡単に要約

されてしまう。「自身はずっと壁をすり抜けていた。／こうしてイワン・セルゲーエヴィチの青年時代と壮年時代が過ぎ去った」。壁抜けを成功する描写のかわりに、テクストの中で比重を増すのは、壁抜けを失敗する描写である。

> 一度、彼は物思いに沈み、壁に足がはまってしまったことがあった。
> 管理人がやって来て、壁を壊す羽目になった。
> 「もうたくさんですよ」管理人は言った。「冗談はおやめください。壁をこんなふうに全部壊さなくちゃならなくなりますよ」（98）

この失敗が『スポーツマン』に生じる第二の災難である。直後、第三と第四の災難が立てつづけに記述されている。とりわけ第四の災難は彼に致命的な結果をもたらす。

> 総じて彼の注意散漫が理由で災難が降りかかった。
> あるとき、お客に呼ばれていた彼は食堂から応接間へ壁を通り抜けたのだが、応接間には花瓶が置かれていた。彼は通り抜けの際にぶつかって花瓶を割ってしまい、大騒ぎになった。
> 彼の死は悲劇的だった。四階にいた彼は壁をすり抜けたが、それはちがう壁で、外に出てしまい、四階から落下して体を打ちつけて死んでしまったのだ。
> こうして、レニングラードのスポーツマンであるイワン・セルゲーエヴィチの目的のない人生が終わった。（98）

イワン・セルゲーエヴィチは壁をすり抜ける途中で誤って外に落ち、死ぬ。最後の一文は、「人生の目的」について考えることを拒否した彼の生涯を、「目的のない／無駄なбесцельная」ものとして総括している。まるで彼が「人生の目的」を持たなかったことを非難するかのように。こうして『スポーツマン』は、題名の如く、壁抜けという超自然的行為を「スポーツ」という現実的な言葉に矮小化し、日常的／常識的／理性的／規範的／合理的／科学的な思考の勝利を嘯くのである。

だが全体としてみれば、これまで確認してきた通り、『スポーツマン』の内容はイワン・セルゲーエヴィチが人生の目的についてむしろ考えたことを契機として、不幸へ傾斜してゆく。彼の災難は「問題の科学的な解決」と「人生の目的」について考える行為を怠ったゆえに生じたのではなく、逆にその行為の結果として生じているのだ。事実、彼に降りかかったすべての災難を一つずつ検討してゆけば、それらが考える行為と結びついていることが明らかになる。その結びつきの強さはほとんど機械的ないし条件反射的であり、グロテスクなほどだ。この短絡的な因果律こそが、『スポーツマン』を統べている法則である。それを検証するため、上に引用した四つの災難に改めて注目してみよう。

2-2. 災難と思考

第一の災難

イワン・セルゲーエヴィチが「人生の目的はどこにあるんだろう？ Где цель жизни?」と妻に問うた直後、「妻の耳が屋根から落下したトタン板に削がれて」しまう。これはあまりに唐突な出来事であり、脈絡を欠いているように映る。しかし、考える行為が不幸の引き金をひくという『スポーツマン』の法則さえ心得ていれば、決して理解に苦しむ成り行きではない。また、妻が死ぬのはイワン・セルゲーエヴィチが「科学的な解決と目的についてずっと考えつづけて думал」いる間であることも、思考と不幸との親和性の高さを印象づけている。

第二の災難

第二の災難でもイワン・セルゲーエヴィチは考える行為に続けて壁抜けを失敗する。直訳すれば、彼は「物思いに沈んでから、壁に足がはまってしまった задумался и застрял ногой в стене」。やはり考える行為が災難を招来しているのである。

第三と第四の災難

最後の二つの災難も同様である。イワン・セルゲーエヴィチが花瓶を割るのも、ついに四階から転落死するのも、「注意散漫 рассеянности」が理由とされているからだ。一見すると、「注意散漫」は考える行為とは正反対の状態であるように思われるが、実は同一のプロセスの表裏をなしている。何かをめぐり物思いに沈むということは、その何か以外のすべてに対する注意が散漫になっていることを意味するからである[16]。つまり、イワン・セルゲーエヴィチの注意散漫の裏側に、物思いを読みとることができるのだ。以上四つの事例により、彼の災難は物を考える行為と直結していると推断することができる。

2-3. 災難と壁抜けの失敗

イワン・セルゲーエヴィチの災難は、壁抜けの失敗とほとんど等号で結ばれている。それは第二から第四の事例が示している通りだ。そればかりか、実は第一の災難においても、妻の死は彼が壁抜けを拒絶したことと、何らかの形で関係している。

彼は居酒屋で郵便配達人から人生の目的を問われ、壁抜けを「純然たる偶然」と一蹴される。傷心のうちに帰宅した彼は、「壁抜けは、純然たる偶然なんだ。人生の目的はどこにあるんだろう？」と妻に告げる。その直後、前述したように、思考は災厄をもたらす、というグロテスクなほど短絡的な法則によって、彼女は落下してきたトタン板に耳を削ぎ落とされ、瀕死の重傷を負ってしまう。

だが壁抜け行為そのものを否定している彼の言葉（「壁抜けは、純然たる偶然なんだ」）も見落としてはならない。イワン・セルゲーエヴィチの災難が、他の事例ではすべて壁抜けの不首尾と直結していたように、壁抜けを否定する言葉もここで重要な意味をもってい

るとみなすべきだろう。そのうえ、彼は言葉によってのみならず、行為によっても壁抜けを拒絶している。帰宅したとき、壁を通り抜けずに、ドアを開けるのだ。彼は家の中へ「ドアから入った вошел в дверь」。

『スポーツマン』には、イワン・セルゲーエヴィチが壁抜けを行なわずに建物内に入る場面が、一箇所だけ存在する。それこそがこの帰宅場面である。わずか 2 頁にも満たない全編の中で、彼が壁を抜けようと試みた回数は十一回にも及ぶが、「ドアから入った」のはこの一回切りである。

第一の災難は、それ以降の災難と同様に、考える行為と壁抜けの不首尾の両方が生じている場で発生しているのである。したがって、『スポーツマン』には次のような 3 つの要素からなる否定的な連鎖が存在していることになる。「思考」―「壁抜けの失敗／拒絶」―「災難」。そもそも壁抜けは超自然的な能力であり、「科学的な解決」を期待できない代物である以上、それが考える行為と鋭く対置されるのは自然なことだろう。

逆に、『スポーツマン』の前半には、成功へと至る肯定的な連鎖が存在している。妻のオリガがイワン・セルゲーエヴィチの壁抜け能力に魅せられて結婚したように、彼の成功は壁抜けの恩恵に与っているからだ。また、彼は明らかに無心に、熟考することなしに、壁抜けを成功させてきた。物語の前半で壁抜けを称賛された彼は、「レンガと木と、通り抜けるにはどちらの壁のほうがようございますか」という問いに、こう答えている。「どちらでも同じです」と（97）。鉄製と木製と、入るのにどちらが好都合なドアか、これまで考えたことのある者がいるだろうか。ドアのように無自覚に壁を出入りできる彼にとって、壁抜けは特別な注意や技術を要する困難な作業では決してない。壁抜けという考えない行為によって、彼は成功を摑みとってきたのだ。ここには、「脱思考」―「壁抜け」―「成功」の連鎖が生じている。思考は災厄を出来させ、脱思考は成功を担保するのである。

ところで、『スポーツマン』を分析したトカレフが書いているように、壁抜けの話は 20 世紀フランス文学にも見出せる。アポリネール『オノレ・シュブラックの失踪』（1910）とエイメ『壁抜け男』（1943）である。詳細には立ち入らないが、壁と一体化ないし壁を通り抜けることのできる男を描いたこれら二つの小説につき、トカレフがそれぞれの主人公に「理性の喪失」と「脱論理」を読みとって、双方の能力を「狂気」と結びつけていることは特筆しておかねばなるまい[17]。

この二人のフランス語作家の短編に比し、ウラジーミロフの掌編は主人公がつねに平静を保っているようにみえるとして、トカレフは両者を峻別している。しかしながら、本論文で見てきた通り、『スポーツマン』における壁抜け能力もまた「理性の喪失」と「脱論理」の位相に、すなわち脱思考の位相に属しているとみなすべきだろう。また、この掌編を著したウラジーミロフ自身、前述したレニングラード大学での「オベリウ」のパフォーマンスにおいて、オベリウ派の掲げた「クワスの近くを昇降段が通った」といった、「脱論理」的なスローガンの下で活動していたことが分かっている。『スポーツマン』の内容はそうした作者の振る舞いとも正しく符合しているのである。

3. ハルムスとの異同

3-1. 類似

人生の目的など、社会的に有意義で有用と思われる事柄について考える行為を格下げしようとするウラジーミロフの姿勢は、多くのオベリウ派に共通している。本項ではハルムスのテクストを取りあげ、その共通点を実際に確認してみたい。

興味深いことに、ハルムスは 1930 年に壁をモチーフとした無題の散文を書いている[18]。そこでは、「思考する技師たち мыслители-инженеры」が壁建設を計画している。入念な準備の末、壁は一夜にして成るが、考案者はふさぎ込んでしまう。「この壁を何に役立てればいいのか、自分にも分からなかった」からだ。

主人公の物思いに着目した『スポーツマン』との比較から、「思考する技師たち」という単語を手掛かりに、ハルムスの短編を吟味してみよう。「思想家 мыслители」と「技師 инженеры」という二つの単語を直列させた呼称「思考する技師 мыслители-инженеры」は、壁建設の発案者をはじめ、「毎晩眠らずに検討を重ね」た技師たちの思索的な傾向を如実に表しているということができる。実際、練られた「計画」と「正確な計算のおかげで」、壁は完工している。もし『スポーツマン』において壁抜け行為が思考の働かないところで遂行されていたとすれば、ハルムスのテクストにおいて、壁の建築はまさしく思考の働きによって遂行されている。したがって、壁を作ること・壁を抜けることは、行為として対称的であるように、思考・脱思考という各々の属性としても対称をなしているとみなすことが可能だろう。

だが思考の働きによって建設された壁は、やがてその建設者の憂鬱の種となっている。なぜなら出来上がった壁は「何に役立てればいいのか」分からない無用の長物だからだ。つまり、考える行為は無用物を生みだしたのである。ここには思考という行為そのものに対するハルムスの皮肉が効いているといえる。

壁というモチーフ、考える行為の格下げ――この二点をハルムスの無題の散文とウラジーミロフ『スポーツマン』は共有している。また、ハルムスは 1920 年代半ばより一貫して、「за ум ザ・ウーム」（理知のむこう）を目指す未来派詩人の手法「заумь ザーウミ」に恃み、『報復』（1930 年）や『フニュ』（1931 年）などオベリウ期の創作においても依然としてこれを用いつづけていた。「オベリウ」の創設メンバーでもある彼が、「理性の喪失」や「脱論理」を標榜していたことは明らかである[19]。第 1 節で述べたように、たしかに両人のテクストは取り違えられるほど似通っているのだ。

3-2. 相違

ウラジーミロフとハルムス各々のテクストの性質には相違点もある。一点目は、思考と脱思考の関わり方である。ウラジーミロフは『スポーツマン』において、思考と脱思考を対立させている。前者は壁抜けの失敗、後者は壁抜けの成功と深く関係しているため、それらは二者択一的な要素とならざるをえず、両立することはない。他方で、ハルムスの上

述の散文において、思考と脱思考は必ずしも著しく対立しているわけではない。考える行為の延長線上に、「思考する技師たち」を途方に暮れさせる壁が建設されたように、両者は地続きの関係にあるからだ。ハルムスにおいてはどんなに精密で真剣な思考も、無用物にやすやすと転じうるのである。

この一点目の相違の派生として、二点目の相違、すなわち物語の決着の仕方に違いが生じる。ウラジーミロフにおいては思考と脱思考の二つの要素が対立し、やがて前者が勝利を収めるため、少なくとも字面のうえでは、分かりやすく教訓的な結末が読者に示される。ところがハルムスにおいて、両要素は容易に区別しうるものではなく、思考はいずれ脱思考に回収されてしまうため、物語は曖昧に閉じられる。そこに社会道徳への配慮は一切示されない。

三点目もこの点に絡んでくる。それは脱思考への眼差しである。イワン・セルゲーエヴィチの転落死に象徴されるように、ウラジーミロフの掌編では脱思考の貫徹が悲観視されているようにみえる。ところがハルムスの掌編には、そもそも思考と脱思考の境界が曖昧なことも作用して、そのような悲観的な態度は読みとれない。むしろ考える行為が一切の意味づけを拒む無用な壁を形成してゆくさまに、ウラジーミロフとは正反対の態度を看取することができるだろう。

これら三つの差異は、今まで俎上に載せてきた二つの掌編のみならず、二人のオベリウ派それぞれの全創作に概ね通底する特徴ともなっている。本論文の最後に、ウラジーミロフの創作全体の傾向を明示するため、『スポーツマン』の他は子ども向けの詩と散文だけが現存している、彼の数少ない作品の中から『あおい点』（1930）という散文を取りあげ、同じく子ども向けのハルムスの散文『コーリカがブラジルに行き、ペーチカがそれをしんじなかった話』（1928）と比較したい。どちらにおいても、社会的な規則や常識を身につけた子どもと、そうではない子どもとの対話形式で物語は進行してゆく。

『あおい点』では二人の男児がアイスクリームを賭けて、「どちらのほうがとおくの字をよめるか」を競争している。青い点としかみえないほど遠くの郵便ポストに記された文字を読むことに、一人だけが成功する。

「ぼくはもっととおくまでよめるよ。ほら、あのとおくのほう、トラムがとまってて、ねずみ色のいえがたってるところ、あおいシミがみえるかい？　なにかわかるかい？」シューラがききました。

「うん」コーリャがいいました。「ゆうびんポストでしょ」

「文字をよんでみてほしいかい？」シューラがききました。

「よんでよんで」コーリャがいいました（ポストはかすかにみえていますが、あおい点みたいです）。

「じゃあ、いいかい」シューラがいいました。「あそこにはこうかいてるあるのさ。〈ゆうびんポスト　てがみをかいしゅうします〉」

かくにんしにトコトコトコトコあるいて、とうちゃく。ほんとうにこうかいてあります。〈ゆうびんポスト　てがみをかいしゅうします〉。

「すごい」コーリャがさけびました。そしてじぶんには 10 コペイカのアイスクリームを、シューラには 5 コペイカのアイスクリームをかいました。[20]

しかし、成功した男児は本当に郵便ポストの文字を判読できたわけではない。実は、「ゆうびんポストにはぜんぶおなじことがかいてある」ことをあらかじめ知っていたに過ぎない。

「ちっともよんでいなかったじゃないか！」コーリャはさけびました。「ゆうびんポストにはぜんぶおなじことがかいてあるって、しってただけだ。アイスをかえしてよ！」

「もうたべちゃったよ」シューラはブウブウいいました。[21]

『あおい点』においては、驚異的と思われた千里眼の能力が、実のところ知識の賜物であったことが暴かれている。子どもの目から眺められたときは神秘を湛えていた世界も、知識の閃光によって日常性を露わにするのだ。ここでは、知識をもつ者がアイスクリームという賭金を手にし、知識をもたない者を負かすという、明白な優劣関係が築かれている。

知識の獲得を推奨するという点に関していえば、やはりシューラとコーリャが登場する同工のウラジーミロフの散文『おうらい На улице』（1930?）はより直接的だ。車の動きを予測しあう二人の男児のうち、自動車や路面電車の動きを予測できた一人は、単に交通規則を弁えていただけだということが、最後に明かされる。彼はこう歌いながら帰途につく。「こうつうきそくを、べんきょうしなさい！」知識のある者が得をすると、読者にあたかも訓辞を垂れるかのように。

他方、ハルムスの短編『コーリカがブラジルに行き、ペーチカがそれをしんじなかった話』も二人の男児が事実をめぐり競いあう物語である。一人だけが常識を頼りにするという構図はウラジーミロフの短編と変わらないが、ここでは彼らの間に明白な優劣関係が生じない。すでに大人のように分別臭い常識人である男児に、そうでない男児は真っ向から対抗し、決して自説を譲らないのだ。

二人はレニングラードの飛行場でパイロットにブラジル行きを懇願し、小型飛行機に乗せてもらう。しかし空の旅は短時間で終わり、飛行機はレニングラード近郊と思しき町に着陸する。帰りの車の中で（車でも帰れる距離なのだ）、常識に照らして物を考える男児は自分たちがブラジルへ行ったことを否定するが、もう一人はブラジル行きを信じ、言い争う。

「ぼくらはブラジルに行ったじゃないか」コーリカがいいました。

「いや、行ってない！」ペーチカがいいました。
「いや、行った！」コーリカがいいました。
「行ーってなーい！」ペーチカがさけびだしました。
「行った行った行った行ーーった！」コーリカがさけびました。（3, 128-129）

彼らの主張は平行線をたどり、少なくともテクストの中でどちらかに軍配が上がることはない。事実はどうあれ、ハルムスは彼らが「ブラジルへ行かなかった」とは明言しない。ウラジーミロフの短編が最後に種明かしをし、あまつさえ知識の獲得を推奨するのとは、大きく読後感を異にする。

ウラジーミロフは「大人向け」の『スポーツマン』においては、壁抜け男が「問題の科学的な解決」や「人生の目的」に思いを巡らせたのを機に、考える行為によって災難に見舞われてゆく様子を描いている。彼はいわば思考に感染したことで、転落するのだ。

ただし、考える行為を否定的に描いている、こうした物語の内実とは裏腹に、ウラジーミロフは肝心のその内実を見えにくくするような書き方もしている。壁抜けという脱論理的な能力の持主に、結局は悲惨な最期を用意することによって、それを反面教師とし、真面目な問題について考えるよう読者に説く教訓譚としても読みうるべく、テクストを構成しているのだ。その教訓は「こうして、レニングラードのスポーツマンであるイワン・セルゲーエヴィチの目的のない／無駄な人生が終わった」という末尾の一文に、端的に示されている。

良くいえばバランス感覚に優れ、悪くいえば日和見主義的なウラジーミロフの創作態度は、子ども向けというジャンルでは社会常識を奨励する明快な教訓譚を生みだすことになる。その点、ハルムスが子ども向けの作品の中でさえ常識への攻撃をやめないのとは、対照的である。こうして、オベリウ派ウラジーミロフの創作の特徴は、同じくオベリウ派ハルムスの創作によって、鮮やかに照射される。

おわりに

早世したオベリウ派ウラジーミロフのテクストはわずかしか現存しておらず、彼の創作の特徴を追究する手掛かりは限られている。そこで本論文では「オベリウ」を結成したハルムスの創作と比較することで、その解明を試みた。実際、彼らは創作上の関係も深く、ウラジーミロフが自作に用いた壁というモチーフをハルムスも用いている。両者のテクストの中には、既存の価値観や規範を破壊し、考える行為そのものを格下げしようとする志向性を見出すことができる。

しかしながら、彼らの創作には相違点もある。常識や通念を批判することを恐れないハルムスの急進的なテクストに比べ、ウラジーミロフのテクストは穏当であり、子ども向けの散文では、社会の規則や常識の習得をしばしば積極的に推奨してさえいる。

総じてオベリウ派同士の交流や影響関係については未解明の部分が多く、研究の余地が

ある。なるほどジャッカールの述べている通り、オベリウ派は必ずしも統一的な芸術観を共有していたわけではないため、「オベリウ」の詩学なるものには注意深くアプローチせねばなるまい[22]。だが今回俎上に載せた二人のように、比較することで互いの特徴を際立たせられる場合も少なからずあるだろう。今後の課題としたい。

注

1. 管見によれば、ウラジーミロフの作品は詩と散文が一編ずつ邦訳されている。詩は次の雑誌に収められている。ウラヂーミロフ（木村祥子訳）「エフセイ」『カスチョール』11 号（1996 年）。散文については、後注 14 を参照せよ。
2. *Токарев Д. В.* Мотив прохождения сквозь стену в русской и французской литературе (Гийом Аполлинер, Юрий Владимиров, Даниил Хармс, Марсель Эме) // XX век. Двадцатые годы: Из истории международных связей русской литературы / Под отв. ред. Г. А. Тиме. СПб., 2006. С. 245.
3. ロシア未来派の影響下にあったオベリウ期のハルムスが、既存の意味づけを超越しようと創作を行なっていた点については、次を参照せよ。小澤裕之『理知のむこう――ダニイル・ハルムスの手法と詩学』未知谷、37-63 頁。
4. 前者は理知の系列、後者は超 - 理知の系列と言い換えられる。詳しくは、前掲書 250 頁を見よ。
5. *Биневич Е.* “Вдохновенный мальчишка” (о Ю. Владимирове) // О литературе для детей. Вып. 16. Л., 1972. С. 141-146.
6. *Рахтанов И.* Рассказы по памяти. М., 1966. С. 143.
7. *Нильвич Л.* Реакционное жонглерство // Смена. 1930. № 81 (переизд: *Введенский А. Е.* Полное собрание произведений. В 2 тт. Т. 2. М., 1993. С. 152-153).
8. Там же. С. 153.
9. ハルムス全集から引用する際は、（巻数 , 頁数）と記す。*Хармс Д. И.* Полное собрание сочинений. В 6 тт. СПб., 1997-2002.
10. 「発起人ダニイル・ハルムス／ボリス・レーヴィン」と書かれた下に、「手伝い：ウラジーミロフ」と記されている。なお、同テクストを初めて公刊したビネヴィチは、「Сустав 関節」を「Состав 人員」に改めている。*Владимиров Ю.* Физкультурник // Искусство Ленинграда / Вступ. заметка и подгот. текста Е. Биневича. 1991. № 5. С. 98.
11. *Рахтанов.* Рассказы по памяти. С. 143-144.
12. *Владимиров Ю.* Давайте устроим оркестр! / Сост. и послеслов. Н. Кавин; Худ. Ю. Богатов. СПб., 2017. С. 92-93.
13. Там же. С. 49.
14. 1994 年に刊行された編者不明の二巻本でこの間違いが起こった。*Хармс Д. И.* Сочинения. В 2 тт. М.: АО «Виктори», 1994. Т. 2. С. 22-23. ちなみに次の邦訳書においても同様の間違いが起きている。ダニイル・ハルムス（田中隆訳）『ヌイピルシテェート』未知谷、2011 年、60-63 頁。
15. 『スポーツマン』の引用は前注 10 の文献からとし、（頁数）と表記する。なお初めて公刊されたのは 1979 年。*Владимиров Ю.* Физкультурник // Slavica hierosolymitana / Публикация И. Левина. 1979. № 4. С. 357-359. 公刊者であるイリヤ・レーヴィンは、執筆時期を 1929 末 -1930 初としているが、ハルムスは 1929 年 5 月の雑記帳に「スポーツマン。ウラジーミロフ」と記しており（5, 288）、この時期すでに執筆されていたか、少なくとも構想は固められていた可能性がある。
16. 西洋近代における人間の知覚の歴史について研究を行なったジョナサン・クレーリーは、次のように述べている。「注意と散漫は本質的に異なる二つの状態ではなく、唯一の連続のもとで存在する」。ジョナサン・クレーリー（岡田温司監訳）『知覚の宙吊り　注意、スペクタクル、近代文化』平凡社、51 頁。
17. *Токарев.* Мотив прохождения сквозь стену. С. 249.
18. この散文や、ハルムスが同時期に書いた壁をめぐる 4 つのテクストについては、次の拙論で詳しく論じている。小澤裕之「『壁のむこうに男が座っている…』：ハルムスの散文における近代的理性の超克」『SLAVISTIKA』35 号、2020 年（予定）。

19. オベリウ期のハルムスは、従来の人間の理知や知覚を刷新するために、それらを一度放棄しようと試みている。詳しくは次の論考を見よ。小澤裕之『理知のむこう』152-221 頁。

20. *Владимиров*. Давайте устроим оркестр! С. 85.

21. Там же.

22. *Жаккар Ж.-Ф.* Даниил Хармс и конец русского авангарда / Пер. Ф. А. Перовской. СПб., 1995. С. 118. たとえばハルムスとヴヴェジェンスキーとでは、詩学も実作も近しいが、彼らとザボロツキーとでは、少なくとも実作の傾向は異なる。

Проходить сквозь стены, строить стену:
о творчестве обэриутов Владимирова и Хармса

Хироюки ОДЗАВА

Целью настоящей статьи является освещение особенностей творчества обэриута Ю. Владимирова (1909-1931). До наших дней дошло всего около десяти стихов и прозаических текстов из его творчества, и о нем пока очень мало исследований. Но можно четко показать особенности его творчества по сравнению с творчеством других обэриутов, особенно Д. Хармса.

Как Владимиров, так и Хармс написали короткие тексты, мотивом которых является стена. В обоих текстах можно увидеть стремление к отклонению от здравого смысла, благоразумия и критериев разума. В «Физкультурнике» Владимирова, единственном сохранившимся до наших дней прозаическом тексте для взрослых, представлено прохождение сквозь стены. У протагониста сверхъестественная способность проходить сквозь стены. Но с того момента, когда он начинает думать о научном решении вопроса и цели жизни, он испытывает несчастья, падает с высоты и умирает.

В тексте Хармса «мыслители-инженеры» строят стену. В противоположность тому, что в тексте Владимирова протагонисту не удавалось успешно проходить сквозь стены, потому что он слишком много думал, в тексте Хармса персонажи стену построили, потому что они тщательно все обдумали. Результаты этих актов противоположны, но у обоих обэриутов схожие мнения по вопросу о здравомыслии.

Впрочем, между обоими обэриутами немало различий. Предположительно существует два ряда: мысли и не-мысли. К ряду мысли относятся обычная жизнь, благоразумие и ум, а к ряду не-мысли – необычная жизнь, неблагоразумие и прохождение сквозь стены. В тексте Владимирова эти два ряда часто вступают в конфликт, и первый одолевает второй. А в тексте Хармса один ряд примыкает к другому, и не всегда один одолевает другой.

Таким образом, кроме сходств есть и различие между творчеством обоих обэриутов. Владимиров создает произведения более благоразумные и понятные, чем Хармс.